

陳舜臣さんを語る会通信

NO.27 Jan. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
 橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
 Tel. 078-911-1671
 編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
 発行日 2021年1月15日

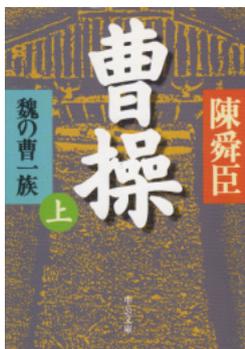
『曹操 魏の曹一族』と『曹操残夢 魏の曹一族』

本号では、『曹操 魏の曹一族』と『曹操残夢 魏の曹一族』をとりあげました。下記『曹操 魏の曹一族』「あとがき」で陳舜臣さんが「続編」とおっしゃっているのが『曹操残夢 魏の曹一族』です。それぞれ初出は、『曹操 魏の曹一族』が、『中央

公論文芸特集』1994年春季号～秋季号、95年秋季号、『中央公論』97年11月号～98年10月号で、『曹操残夢 魏の曹一族』は、『中央公論』2004年1月号～05年3月号です。後者は、陳さんの最後の小説となりました。(編集委員 橘雄三)

中公文庫『曹操 魏の曹一族』
 「あとがき」から
 文中、傍線は編集委員加筆

この作品は「魏の曹一族」という総タイトルで、『中央公論文芸特集』という季刊誌に連載を始めたものである。(中略)
 ところがこのたびは『中央公論文芸特集』が、しばらく休刊することになり、連載小説はひと休みしたあと、月刊の『中央公論』に執筆することになった。(中略)
 曹操にしても、家庭人としてのすがたをもっと濃くえがかなければならないと思う。ただ記録されることがすくないので、作者は小説家としての特権で、事実に近いと思われる想像をまじえた。ただし、それによって史実をまげたことはないと思っている。(中略)
 小説をかくのに、あまりにも小説的すぎる部分はずし、できるだけ時代の雰囲気を出そうとした。またこれまでの三国志物語には、仏教的要素が欠落していたという気がする。仏教の伝わった道、西域とその住民たちにも、この物語に参加してもらいたいものである。(中略)



(中公文庫表紙)

一九九八年十月
 六甲山房にて 陳舜臣

三国志は洛陽が破壊されて、それが再建される物語でもある。死を前にして曹操が踏みしめたのは、洛陽の土であった。幼い日の思い出が、におい立つような洛陽のまちである。そこで彼は生涯を終えた。(中略)
 正史『三国志』は彼を評して、非常の人であり、超世の傑であったとする。乱世を勝利者として生き抜いたので、とうぜん非常の人である。そしてとうぜん世を超えた傑物である。しかし、その世が乱世でなければどうであろうか？人相見の許劭は、曹操の相をみて、「清平(平和時)の姦賊、乱世の英雄」だと言った。(中略)平和なときであれば、問題の多いワルであつたらうというのだ。そのとおりであったにちがいない。
 曹操の息子たちの世代の話は、続編にかくことになる。(後略)

『三国志』の時代

25

～220

後漢 洛陽 ①光武帝劉秀～⑭献帝劉協



曹操 Wikipediaより

※後漢から魏へ 4頁に補足
 孫権 (182～252)
 諸葛亮 (181～234)
 劉備 (161～223)
 曹操 (155～220)

三 国 時 代 (220-280)

220～265

魏
 洛陽
 曹丕

魏では司馬氏が実権を握り、魏帝の禅譲を受け西晋建国

265～316

西晋
 洛陽
 司馬炎

蜀滅ぼされる

221～

蜀
 成都
 劉備

263

222～

呉
 建業
 孫権

280

呉滅ぼされる

『曹操 魏の曹一族』時代背景と登場人物

《 1. 時代概観 並びに 後漢の皇帝 》

1世紀初め、漢の外戚王莽が国を奪って新(8-23)をたてた。王莽は、ただ周の政治を理想として社会の実情を無視したため、農民による赤眉の乱や地方豪族の反抗がおこり、新はたちまち倒れた。この反乱をおさめて漢を復興したのは漢の一族の劉秀(光武帝25-57)であった。

後漢では2世紀に入ると幼帝が続き、宦官や外戚がはびこり、これに反対する儒教の教養を身につけた官僚や学者は弾圧された(党錮の禁 166、169)。

また地方では豪族が勢力をはり、農民の反乱があいつぎ、国力は急速におとろえた。農民反乱の最大のもは、華北で張角がおこした黄巾の乱(184)であった。乱はたちまち広がり、各地に群雄が割拠し、政情は混沌をきわめた。「三国志」の時代のはじまりである。

後漢 (25-220) 皇帝	①光武帝・秀(25-57)、②明帝(57-75)、 ③章帝(75-88)、④和帝(88-105)、 ⑤殤帝(105-06)、⑥安帝(106-25)、 ⑦少帝(125)、⑧順帝(125-44)、 ⑨冲帝(144-45)、⑩質帝(145-46)、 ⑪桓帝(146-67)、⑫靈帝(168-189)、 ⑬少帝・辯(189)、⑭獻帝・協(189-220)
れいてい ⑫靈帝	稀代の暗君。宦官と士大夫の反目が強まった中、宦官優勢の時代であった。党錮の禁(166、169)の169年の方は靈帝在位中のできごと。崩御後、実子の劉辯と劉協の間で帝位継承争いが起きる。これに乗じて、頭角を現したのが董卓

《 2. 登場人物 》

そうとう 曹騰	家運の傾いた曹家は、窮余の策として一人の少年、曹騰を宦官にした。曹騰は宮廷に入り、6歳の皇太子の学友役をつとめる。皇太子はやがて、後漢第8代順帝となり、曹騰も、宦官の最高位「大長秋」に上り詰める。順帝の時代、宦官が養子を取って爵位を世襲することが許されるようになる。曹騰は縁続きの夏侯家から養子を迎える。それが、曹操の父・曹嵩であった。曹騰は4帝に仕え、曹家は大富豪となった
そうすう 曹嵩	曹騰の養子。太尉(国防相)となり、功成り名遂げて引退するが、非業の死をとげる
そうそう 曹操	字は孟徳。曹嵩の子。豫州沛(はい)の人。青州黄巾軍を傘下に収めて実力をつける 曹操には、「正室丁氏、側室卞氏のほかに、劉氏という妾もいた」。丁氏には子がなく、早く死んだ劉氏の子・昂を育てていた。他に環氏との間に沖。丁氏とはのち離別
こうしゅ 紅珠	曹操が少年時代に思いを寄せた従妹。靈帝の皇后の兄宋奇に嫁ぐ。夫と死別。のち、曹操にとって、生涯、心安まる女性となる
かこうとん 夏侯惇	字は元讓。曹操の従弟。親同士が実の兄弟。曹操の部曲(武力集団)を束ね育てる
そうじん 曹仁	字は子孝。曹操の従弟。曹操に心服する腕白者。のち周瑜と対峙する名将となる
ぐんせん 群旋	ソグド人。曹操とは祖父同士、親交があった。祖父がしたように、自分も西域の交易で蓄財し、曹操を助きたいとの思いがある
べんえん 卞遠	琅邪出身の商人。長安の酒屋の主人。八珍伯とも千里風とも呼ばれる
べんこう 卞厚	卞遠の娘。曹操が見初め側室に。のちに正室となる。曹丕、曹彰、曹植の母
フィローズ	ソグド族の奇術師。曹操を支援する
せいしゅう 青州先生	曹操と面識はないが、互いに尊重し合っている。青州黄巾30万の指導者
きょしょう 許劭	人物鑑定家。曹操を「清平の姦賊、乱世の英雄」と評する
えんしょう 袁紹	名門の出。字は本初。曹操とは竹馬の友。官渡の戦いで曹操に大敗
袁術	袁紹の従弟。実は腹違いの兄弟。犬猿の仲
とうたく 董卓	隴西の人。靈帝が崩御、実子、劉辯と劉協の間で帝位継承争いが起きる。勞せずして二人を保護することになった董卓は天下を狙う。各地の反董卓の挙兵に際して洛陽を焼き尽くし長安遷都を強行する。呂布に斬られる
りよふ 呂布	強さでは関羽と並び称せられるが、その生涯は裏切りにまみれたものであった
そんけん 孫堅	孫策、孫権の父。黄巾軍鎮圧で頭角をあらわす。反董卓戦では洛陽一番乗りをはたす
ちょうかい 張闔	徐州に勢力を張る陶謙の部将。曹操の父・曹嵩一行の出迎え、護衛を頼まれながら邪心を起こし、曹嵩を殺害、財を奪う
しばい 司馬懿	字は仲達。曹操の側近、武將。諸葛孔明と戦う。孫の司馬炎が西晋建国

劉備、孫権それぞれの陣営の参謀、武將など、著名な人物は、ここでは省略しました。



『曹操 魏の曹一族』いくつかの補足

下の上段です。曹操のよく知られた軍事行動といえば、①父を殺された復讐戦とそれに続く戦い(193年から数年)、②袁紹と、中原で覇を争った官渡の戦い(200年)、③劉備・孫権連合軍との赤壁の戦い(208年)などです。

①については、陳舜臣『諸葛孔明』にも、曹操の

復讐戦のあと、14歳の孔明が徐州の下邳を通り、白骨化した遺骸さえ残る荒廃ぶりを目にする場面があります。後年、孔明が劉備の軍師となる伏線です。

中段です。陳さんは曹操の「歩出夏門行」が好きです。これについてふれます。

下段は、橋本関雪の『赤壁賦図屏風』です。

「父の死」の章より
憤怒の炎に包まれた曹操

一九三年、徐州の牧・陶謙の部将張闓が、琅邪から兗州へむかう曹操の父の一行を襲い、父、弟ほか、供のものを惨殺、財を奪うという事件が起きます。

喜怒哀楽の表現の仕方が、曹操はもとも過剰なほうであったが、こんどの父の死には常軌を逸するところがあつた。
(中略)

冷徹な曹操がこのときばかりは憤怒の炎に包まれた。
陶謙への復讐戦にとりかかった期間には、「曹操が曹操でなくなつた時期」であつた。
(中略)

『三国志』には、このあと、
—— 過ぐる所、多く残戮せらる。
—— という記述がみえる。
これはみちみちな殺しをした、というおそろしいくだりである。
(中略)

—— 男女数十万人を泗水に坑殺(あなうめ)し、水為に流れず。
(中略)

—— みな之を屠り、鶏も犬もまた尽き、邑もあはれて、人影もなくなつた。

あまりの残酷さに、曹操に背く家臣さえでてきます。また、呂布のような強敵と戦つたり、この後数年、曹操は、彼の戦陣生活のなかで最も苦しい時期にありました。

「志は千里に在り」の章より
「歩みて夏門を出ずる行」

南征を目の前にして、曹操がうたったのは、「歩みて夏門を出ずる行」という、古い歌謡に、彼自身が歌詞をつけたものである。
(中略)

神龜雖壽 神の如き龜は 寿と雖も
猶有竟時 なお竟る時有り
騰蛇乘霧 のぼる蛇は霧に乗れど
終為土灰 終には土灰と為る
老驥伏櫪 老いたる驥は櫪に伏すとも
志在千里 志は千里に在り
烈士暮年 烈士は暮年にも
壯心不已 壯心已めあえず
(以下六句略)

しわぶき一つしないなかを、曹操は朗々とうたった。
(中略)

「歩みて夏門を出ずる行」をうたつて、曹操は鄴城の門を出て南へむかつた。めざすは濡須口である。

右は『曹操 魏の曹一族』からの引用ですが、陳さんは、二〇一〇年四月六日『毎日新聞』「老いに学ぶ」でも、同じ部分、次のように語っておられます。

「老いたる名馬は厩で寝そべっていても千里のかなたまで走ることを夢みている。男は老いてなお意気盛んでなくは」
お亡くなりになる五年前の心境です。

北宋の詩人、蘇東坡が、「三国志」で有名な古戦場を訪れ、その景色と心情を綴ったのが「赤壁賦」です。「此れ孟徳の周郎に困(くる)しめられし者(ところ)に非ずや」と孟徳(曹操の字)や周郎(周瑜の渾名)もでてきます。橋本関雪は「赤壁賦」を題材にして『赤壁賦図屏風』を描きました。

なお、蘇東坡が訪れた場所は本当の赤壁ではありません。この地は、晩唐の詩人杜牧が詩に詠んだことから赤壁の古戦場と見なされるようになり、蘇東坡の作品によって、実際の古戦場以上に有名になってしまいました。(『赤壁賦図屏風』は明石市立文化博物館蔵)



『曹操 魏の曹一族』の続編は『曹操残夢 魏の曹一族』

総タイトル、「魏の曹一族」執筆にあたって、こんなエピソードがあります。以下、『読売新聞』1998年12月5日夕刊「Special Interview 陳舜臣さん」から引用します。

「ずっと前から曹操を書きたかったんですが、実は司馬さんに遠慮していた」という。故・司馬遼太郎氏もまた、曹操を書きたいと漏らしていたという。「なのに、彼は『韃靼疾風録』を最後に小説は書かないと宣言したでしょう。ならば、と取りかかったんです」

念願叶って書きはじめた『曹操 魏の曹一族』ですが、波乱の連続でした。

季刊誌『中央公論 文芸特集』で連載が始まったのが94年春だが、同年8月に脳出血で倒れ、翌年1月、退院四日後に阪神大震災に遭遇。同年秋に『文芸特集』が休刊となり中断、『中央公論』本誌で97年から連載再開…。ここまで5年を費やした。

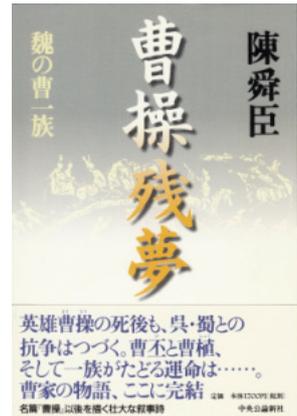
難産だったのです。

ところで、『曹操 魏の曹一族』は、いわば、「魏の曹一族」の前半であって、陳さんは、本号1頁の「あとがき」で、「曹操の息子たちの世代の話は、続編にかくことになる」とおっしゃっています。

その「続編」が『曹操残夢 魏の曹一族』で、『中央公論』2004年1月号

から05年3月号にかけ、連載されました。『曹操 魏の曹一族』連載開始から、なんと11年かかっています。陳さん最後の小説となりました。

『曹操残夢 魏の曹一族』については紹介にとどめ、ここでは、もう少し、『曹操 魏の曹一族』から引用します。



(中央公論新社)

二一六年、曹操は「公」から「王」になった。

「時は過ぎ時は来る」及び「超世の傑」の章より

後漢の献帝、曹丕に帝位を禅譲

「時は過ぎ時は来る」の章

曹操は魏王となった。(中略)

皇帝の下に王がいる。

古くから藩屏といわれ、皇帝をまもる勢力のはずである。だから異姓の王なしといわれた。漢は劉姓である。それを守る王はかならず劉姓なのだ。

ところが曹操は劉姓ではない。むかしから、あつてはならないとされていた「異姓」の王である。

「公」のあいだはまだ辛抱できるが、「王」となれば異姓はまずいのではないか。

—— そう思う廷臣は多かった。しかし、その声は表にあがってこなかった。それだけに裏にこもっていたのである。(中略)

「こんどもお祝いのごときは要らないわね。篡奪のときに、かためてゆつくり申し上げることにしますわ」と紅珠は言った。

「篡奪ということばは使いたくない」曹操は目をしばたいたいて言った。

「では、何なの？」

「天命だ。」(中略)

「めでたいことですね。ここまできてまだ篡奪に踏み切れないのね」

紅珠は唇をすこし歪めた。

(中略)

魏の王太子が決定した。五官中郎將の曹丕である。

「超世の傑」の章

「わしはやはり周の文王でよいわ」というのが、このごろの曹操の口ぐせであった。周は文王の死後、武王が殷を滅ぼして、天下のあるじとなった。

—— 子桓(丕のこと)さまざま待たねばなりませんかと、夏侯惇は不満そうであった。

(中略)

魏王曹操は建安二十五年(二二〇)正月庚子の日、洛陽において崩じた。年六十六。

同年十月、後漢の献帝は曹丕に帝位を禅譲(後漢滅亡)。献帝・劉協は山陽公に封じられ、二三四年に死んだ。

易姓革命、禅譲放伐

中国では、王朝が交替することを易姓革命といいます。易姓とは、例えば、劉氏の後漢から曹氏の魏へというように、王朝の支配者の姓が易ることで、革命は天の意志(命)が革ることを意味します。

なお、易姓革命の形式には禅譲(天子が皇位を譲ること)と放伐(徳を失った天子を討伐、放逐すること)の二つがあるとされます。実際には、武力で討っておきながら、形式的に禅譲に似せるものが少くありませんでした。